

桐の家

えいぞう

まえがき

世の中には古い慣習に根ざした生き方がまだ、存在をしています。それは因縁めいて、血族の心に深い波紋を残すものです。

先祖の誰かが、苦悩して子孫に託した夢を叶え切れなくて、もがく姿は誰かに打ち明ける事はなくても、自分の心の中では、重い重圧にもなるものです。私は、桐の樹という存在をモチーフにして、私小説的に人の苦悩する様を描いてみたいと思いました。それは、人に限らず自分自身が試行錯誤している世界でもあり、その内界世界は暗く光が照り輝いているような状況でもありません。周りからとかく噂される家はよく聴く所ではありますが、この時代にあつては、風当たりが厳しいのも承知をしています。かつて華やぎが兆していた家にあつては尚更、将来に向けても同じでありたいと願い、夢を子孫に託そうと必死になるのは、悲しい定だとも感じます。私も小さい頃から先祖のありようを聴かされて育ちました。聴けば聴くほど、胸がつぶれる思いが募るばかりでした。

家にはその家なりのしきたりがあり、それを捨て去る事はどうしても出来ないのです。この自由に生き方の選択を望める時代になつてもまだ、血族の中に流れる蟠りに捕らわれて

いる人がいます。そして、私という人間がいます。自分では自分らしく生きようとしてついその枠を取り崩そうと抵抗しても、許され得ないのは、寂しい事です。桐の樹にはそういう、葛藤の深層を重複して眺める事の出来る何かが備わっていると信じて止みません。

私は四季を通じてこの桐の樹を見て過ごしています。言わずと知れた複雑な人間模様の中で自分というものは一体、何者であろうかとも大人になつた今でも結論の出せない儘に惰性的に日々を送っている次第です。風変わりな家とも言われるのに、どうして血族は昔の風習の儘で、細々と生きて行くとするのでしょうか。桐の花が咲いているのを見ていると感極まって涙が出そうになり、それを堪えるのに一生懸命になることもあります。

世の中には、私ばかりではなく、いろんな呪縛に耐えて辛抱をしている人は多いのではないのでしょうか？私は、短歌と言う表現形式で世に問うてみたかったです。

良き理解者が得られれば私も満足が行きます。

大きくも古き桐の家の樹にうす紫の花ぞ匂へる

萌葱より新緑に映えて現実のあちらこちらに桐の花房

さ
乱れてホツと息つく景色にはその桐の樹の花の濃く燃え

女性ひとごとに俯く気持ちの葉に揺れ涯きはかんじてか緩やかに落とし

乙女子が連れ立ちて行く邪心なき空の上たかく桐の紫

大母おほははの系譜けいぷに訪とひたき桐の樹いの謂いはれの定の古ふるびたる事こと

そう、
気付きしは母がしまふ着物の手先に見え隠れする

簞笥の引き手の膚の……。

嫁入りの荷物のひとつひとつがほら、娘の時分の夢と騒げる遠き記憶に

嫁ぐこと自体に胸の広ごりの駆け上がる思もひに輝き増してゐし頃よ

何時の間にか忘却のフィルムのまた眼に浮かび来る時とき代

その桐の誰と生きて来て今も尚まもらむとするか血脈の印を

慣はしに女児こみなごうまれて庭隅に〈桐植きりうゑぬ。〉……とは、幾度いくたびきけり

あれはボクが学生鞆を手にバスの窓の一角に見つけし驚き

眼に紫の花房のキュンと来る下枝しづえの太く誰に切られるでもなく